

## なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動

著者	内田 吉哉
雑誌名	NOCHS Occasional paper
巻	10
ページ	49-56
発行年	2010-01-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/3014">http://hdl.handle.net/10112/3014</a>

## なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動

## 内田 吉哉



内田でございます。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの活動につきまして、今年度の活動を中心にご紹介したいと思います。当センターの研究活動は、大きく分けて、国際シンポジウム、文化遺産学フォーラム、地域連携企画、レクチャーシリーズ、ワークショップ、研究例会、特別プロジェクトがあり、そのほかに大阪の文化遺産に関する資料収集も行なっています。それぞれ、写真をご覧いただきながら紹介いたします。

まず、「国際シンポジウム」につきましては、当センター設立以来4年間で5回開催しているのですが、そのうちのいくつかをご紹介します。この写真は、昨年度に日本、中国、韓国の三ヶ国から、大学教員や文化行政担当者、そして観光コーディネーターをされている方などをお招きしまして、「文化遺産」という共通のテーマでご講演いただいたときの様子です(図1)。これからご紹介させていただくことと関わってくるんですけども、昨年度あたりから、私たちのセンターは、他者との比較・対比の中で大阪の文化遺産を考えるというスタンスになってきたように思われます。今から思いますと、この国際シンポジウムがそのスタート時点だったのかなという気がいたします。先ほどの藪田先生のお話にもありましたように、私たちのセンターの一つの大きな特徴は、観客動員力が非常に高いということですので、このシンポジウムは、基本的には一般市民の方に還元するという目的で、このときで恐らく200名弱の方がたに集まっていたいただきました。



図1

もう一つの国際シンポジウムとしましては、新聞でも報道されましたので、ご存知の方もおられるかと思いますが、オーストリアで豊臣時代の大阪を描いた屏風が発見されたということに端を發しまして、オーストリアの州立博物館と、大阪城天守閣、それと私たち関西大学が三者で共同研究協定を締結いたしました。これは、後ほどご説明いたします「特別プロジェクト」という研究とも関わってくるのですが、豊臣期大阪図屏風の共同研究協定に基づく国際シンポジウムを開催しております。これも昨年度のことになりますが、この時は300人ほどの市民の方に集っていただきました(図2)。これは屏風にお客さんが見入っている光景なんですけれども(図3)、実物の屏風につきましてはオーストリアにありますので持ってくることはできません。研究に際しまして、豊臣期大阪図屏風の複製品を作製しましたので、それを展示しているところです。



図2



図3

もうひとつだけ、国際シンポジウムを紹介いたします。これも、先ほどの豊臣期大坂図屏風に関わるものなのですが、今度はオーストリアに赴きまして、国際シンポジウムを開催しました。これがその時の写真です(図4)。先ほど申しましたように、実物は現地にございます。要するに、今屏風は一点一点ばらばらにされて壁にはめ込まれてますので、わざわざ壁から外して日本に持ってくるということとはできないわけです。ですから、壁にはめ込まれた状態の屏風を現地調査することも併せて行ないました。



図4

さて、次に「文化遺産学フォーラム」という研究行事についてご紹介いたします。本来ですと、レギュラーの研究行事としてはこの文化遺産学フォーラムというのが最大規模のものになりました。年に1度の開催ということになっています。これも、基本的には市民の方に来ていただくということを目的としています。今、写真でご覧いただいているのが、今年度の文化遺産学フォーラムです(図5)。今年は「水」をテーマにしました。大阪をフィールドにして水と文化遺産ということ

を考えた場合、一つには淀川という大きな川が思い浮かびます。しかし、先ほどの日中韓三ヶ国の国際シンポジウムで少しお話いたしましたように、ここ1、2年の私たちのスタイルとして、他者と対比する中で大阪の特徴を際立たせていくという方法をとっています。そこで、対比する相手として、同じく地域連携をコンセプトとした山形県の東北芸術工科大学東北文化研究センターと、山形県を縦断する最上川と大阪を貫く淀川との対比をテーマとして、「水がむすぶ文化遺産」というフォーラムを行なうことになりました。



図5

また、文化遺産学フォーラムは、一般市民の方にはできるだけたくさん来ていただきたいということで、講演やパネルディスカッションにあわせて、何らかのアトラクション的な要素を盛り込むというのが一つの特徴となっております。今年度は、落語大学(関西大学の落語研究会)の学生さんに依頼しまして、水にちなむ落語を一席演じてもらうという試みをいたしました(図6)。このように、楽しく集ってもらえるかどうかというところに気を配った面が、この文化遺産学フォーラムの一つの特徴であります。



図6

また、今年度文化遺産学フォーラムを開催いたしましたときには、両センターの親交・交流を目的とした「文化遺産学交流会」を開催しました。現在ご覧いただいている写真が、東北芸術工科大学の菊地和博先生と岸本誠司先生です(図7)。そのお二人に集まっていただいて、それぞれの活動の紹介と意見の交換を行ないました。今回はその二回目ということでございます。



図7

続きまして、「地域連携企画」という研究行事がございます。これは、最初は大学が地域に還るというコンセプトのもと、河内国府遺跡の出土品を関西大学が所蔵しているということで、本来の出土地である道明寺天満宮で展示を行ないました。ですので、最初のころは私たちの中では、この地域連携企画に「出開帳」というあだ名をつけていました。しかし、回数を重ねるにつれまして、企画のスタイルが変わってきまして、昨年度の「もめん博物館 in 平野」という地域連携企画を例にとりますと、大阪市平野区という町づくり活動が大変盛んな地域で、その町づくりの会の方たちとの共同で地域連携企画を催すようになりました。



図8

そして、今年度の地域連携企画は、関西大学に来たばかりの留学生を平野に案内しまして、一人一人にカメラを渡して、平野の町を写真におさめてもらいました。この写真は、留学生が使い捨てカメラで平野のまちの中を自由に歩き回り写真を撮っている様子です(図8)。



図9

さらに、その翌週には、平野にある杭全神社の瑞鳳殿をお借りしまして、三人の先生方による鼎談と、写真コンテストという企画を行ないました。左側の和服を来ておられる方が、杭全神社の宮司である藤江正謹先生。中央に写っているのが、当センターの研究員である鶴崎裕雄先生。そして、右側に座っておりますのが、同じくセンターの研究員である大阪城天守閣の北川央先生です(図9)。藤江先生は、会場をお借りしています杭全神社の宮司さんであるということ、鶴崎先生は日本で現在唯一連歌所が現存している杭全神社において、連歌会の運営に携わってられるということ、それから北川先生は、高校時代を平野で過ごされたということから、このお三方を講師としてご依頼いたしました。お三方とも、学識の高い先生ではありますが、学術的な話ではなくて、杭全神社についての楽しいお話を聞かせていただきたいという企画でした。ポスターを貼る程度で特別なご案内もいたしませんでしたが、私たちのセンターにもだんだんと固定ファンがついてまいりまして、企画を催しますと地元の方たちが自然と集まっています。

次に、「レクチャーシリーズ」という企画についてご説明いたします。このレクチャーシリーズというのは、市民向けの公開講座に当たるもので、基本的には毎年2回の開催になっているので

すが、今年度は1回の開催でした。毎回それぞれテーマを設定しまして、講師の先生をお招きしております。ちなみに最近の第7回は、なにわの食文化に関わるということで、大阪ガスエネルギー研究所の山下満智子先生、日本の食文化の歴史を語っていただくということで、林原美術館館長の熊倉功夫先生をお招きしてお話を伺いました(図10)。先ほど申しましたように、センターにもだんだん固定ファンがついてきてまして、この写真の真ん中に映っている方が料理研究家の上野修三さんでございます(図11)。上野先生に聞いていただきたいということで、私たちからアプローチしたわけではありませんが、センターの名前が知られてくるにしたがって、食文化に関する行事のときには、上野さんに駆けつけていただいているようになってきています。



図 10



図 11

続きまして、「ワークショップ」に移ります。ワークショップは、年に2度開催しております。私たちの研究センターの場合、大衆文化のようなものまで含めて文化遺産だと考えていますので、今年度のワークショップでは、紙芝居をテーマといた

しました。この着物姿の方が、現役の紙芝居師の一人である鈴木常勝先生です(図12)。立命館大学のほうで、紙芝居の文化をテーマとした講義をしておられます。このワークショップは、企画を大きく二本立てにいたしまして、紙芝居は文化遺産の一つであるという切り口で鈴木先生に講演をしてもらったというのが一つ。また、紙芝居が文化遺産だと言いましても、見てみないことには始まらないということで、実際に紙芝居の実演をしていただきました。さらに、紙芝居の実演に当たりましては、駄菓子がつきものなので、実際に駄菓子も購入しまして、紙芝居文化を肌で味わってもらいました(図13)。



図 12



図 13

このほか、藪田先生から紹介されましたように、祭礼遺産、生活文化遺産、学芸遺産、歴史資料遺産という4つの研究プロジェクトが基本的に設置されておりますので、それぞれの研究プロジェクトの研究例会というものが開催されています。それぞれの研究プロジェクト単位での研究会が年に2回ずつ、4プロジェクトですから合計8回の研究会が催されるということでございます。

ここまでが、本来センターを設立する際の構想に含まれていた研究行事だったんですけれども、センターを運営していくに当たりまして、当初の構想をいい意味ではみ出すものが出てまいりました。それを私たちの場合、「特別プロジェクト」と位置づけております。

そのうちの1つが、先ほどご紹介いたしました、豊臣期大坂図屏風の研究です。先ほど申しましたように、国際シンポジウムを開催いたしておりますし、もう一つには、「豊臣期大坂図屏風研究会」を開催し、研究者レベルでの意見交換を行なっています。その際に、神戸大学の大津留厚先生にお越しいただきまして、青野原の俘虜収容所のお話を伺ったり、また別の日には、大阪城天守閣に会場をお借りしまして、研究会を開催しました(図14・15)。



図14



図15

特別プロジェクトと位置づけられています2つ目には、先ほど藪田先生がお話されましたように、八尾市の植田家住宅の調査が挙げられます。調査対象として、一つには書籍ですとか古文書といった正統派のものもございますし、一方では民俗学

の立場から、蔵の二階にある民具の調査も行なっております(図16)。



図16

この真ん中に写っております、黄色い足がついておりますのは3Dスキャニングの機械でして、建物の中を3Dの状態ですキャニングして、それをコンピュータで立体的に再現できるというものです(図17)。このようにして建物自体を調査することも行なっています。調査はすでに終了しまして、この旧植田家住宅が、来年の5月に史料館として新たにオープンするという計画が八尾市のほうで進んでおりまして、センターでは現在、その設立に向けての準備に携わっています。また、オープニングに向けて、報告書及び展示図録の作成も八尾市と提携して進めています。



図17

3つ目の特別プロジェクトとしまして、上町台地マイルドH O P Eゾーン協議会からの受託研究という形で進めている、「上町台地暮らしの歳時記調査」があります。上町台地の生活に関わる年中行事を、聞き取り調査を通して行なっています(図18)。



図 18

4つ目としまして、学校教育における副読本を作成するというプロジェクトがありまして、現在なにわの伝統野菜の栽培をテーマに進めております。私の個人的な意見としましては、文化遺産学についての入り口が整備されていない状態だと思っておりますので、この副読本作成が文化遺産学の周知を図っていくうえでの一つの契機になるか思います。これは編集会議の様相ですが、私たちのほかに、小学校の先生、教育関係の出版社の方、農学博士の森下正博先生（研究協力者）をお招きして、進めています（図 19）。また、実際小学校に出向いて、伝統野菜の育成・栽培の調査も行なっています。



図 19

さて、もう一つの特別プロジェクトとして、杭全神社総合調査を取り上げます。2月1日に神戸大学にお邪魔させていただいたときは、大学の教員の方、郷土資料館や博物館にお勤めの方、文化財行政に携わっておられる方などといった方がたを軸としてネットワークが広がっているんだなという感想を受けたんですが、私たちの場合、そのネットワークの核になるものは寺社でありまし

て、杭全神社のほかに、道明寺天満宮ですとか、大阪天満宮、四天王寺といった寺社の調査がプロジェクトに大きく関わってきます。これが調査風景です（図 20）。この調査に当たっては、文書だけではなく、美術工芸品や境内に建てられている石灯籠、さらには大きな古木も含まれます。つまり、景観を含めた総合的な文化遺産調査を行なっていくわけです。



図 20

さて、私たちのセンターは、自分でやってみることが比較的多いのですが、その例として、なにわの伝統野菜の栽培が挙げられます。京野菜は有名で、ブランド化もされていますが、大阪でも、府が認定した伝統野菜がございます。そこで、この建物の裏側にある「なにわ実験農園」と名づけた小さな畑で、実際に伝統野菜の栽培を行なっております。これが、大阪在来種の勝間南瓜こつまなんきんを収穫している状況です（図 21）。また、関西大学があります吹田にも吹田慈姑すいたくわいというものが伝統野菜としてありまして、私たちのセンターでも実際に吹田慈姑を栽培しています。また、吹田慈姑に関しては、吹田の市民団体の方が普及活動もなさっており、その方がたとも連携を図っています。



図 21

さて、これは少しイレギュラーなお話なんです  
が、2年前（2006年）がちょうど関西大学の  
創立120周年に当たる年として、「特別公演 箒  
の舞楽」と題して、1,000人規模のお客さんを  
集めた行事を行ないました（図22）。四天王寺では、  
聖徳太子の命日に「聖霊会の舞楽」が奉納されま  
す。その舞楽は「天王寺楽所雅亮会」が保存され  
ているわけですが、その小野功龍理事長が  
センターの研究協力者ということもあり、天王寺  
舞楽を丸ごと関西大学の広場に持ってきまして、  
目の前で演じていただきました。



図 22

では最後に、センターが今年度収集した大阪の  
文化遺産に関わる資料について、ご紹介させてい  
ただきたいと思います。



図 23

まずは、お菓子などの食べ物の商標を貼込んだ  
折帖があります（『大阪菓子食物他商標広告  
貼込帖』）。正統派の文書や書籍だけではなくて、  
こういうものにも目を向けて収集を進めておりま  
す（図23）。これも同じように貼込帖なんですけ  
れども、『大阪魚料理切手貼込帖』といいまし  
て、貼られている内容が大阪の魚料理に関する商

品切手になります（図24）。ちなみに、右下にあ  
るものは蒲鉾の商品切手です。



図 24

これは『京阪土産名所図画』<sup>けいはんみやげめいしよずが</sup>といいまして、明  
治時代のものですが、こういった近代に  
入ってからの刷り物等の収集も行っております  
（図25）。そして、これは『西坊島村文書』<sup>にしほうじまむらもんじよ</sup>とい  
うものです。箕面市の西坊島地区に伝わる文書で  
す（図26）。こういった文書類も収集の対象とし  
ています。



図 25



図 26



それから、これは『浪花軍記』というものです(図27)。大阪の文化遺産ということに関して研究していきますと、やはりどうしても大阪城ですとか豊臣秀吉ということがどこかで絡んでくるということで、大阪の陣の様子が書かれた『浪花軍記』という書籍を収集いたしました。



図 27

それから、今ご覧いただいているのは、菅橋彦すがたてひこという大阪画壇の画家が書いた和歌の掛幅です(図28)。絵画の世界において、京都画壇に比べると、大阪画壇というのは、国内ではマイナーだけれども、海外に行くとかえって注目度が上がったりすることがございます。例えば、江戸の浮世絵は有名だけれども、上方の浮世絵はそれほど国内ではメジャーではない。ところが、海外では、すごく熱心な研究者がおられたりします。そこで我々は、大阪画壇というものにも目を向けた研究をしていこうということで、大阪画壇を代表する画家の菅橋彦に関する資料の収集も一つのテーマとしています。



図 28

以上のような研究活動を行なっています。最後に結びにかえまして、私の考えを少し述べさせていただきます。これまでお話させていただきましたように、基本的にセンターでは、一般市民の方を対象に行事を行なうものですから、運営が大変でして、私たち P.D.・R.A. が行事の運営自体に忙殺されるというデメリットがございます。ただ、そのかわり一般市民の固定ファンがついてくるといった成果も感じておりますので、一長一短ではあると思います。

ただ、一つ問題点として思いますのが、私たちの研究センターは、5年計画の補助金事業でして、現在4年目を迎えました。もし5年目が終了して事業が終了した場合に、これまでの市民とのつながりをどう維持するのかがはっきりしていません。ですので、このセンターの行く末とともに、少し不安を感じているところでございます。以上になります。ありがとうございました。